

英授研 35 周年を迎えて

副会長 和田憲明（姫路大学）

2024年8月大阪商業大学で第35回全国大会が開催され、両日で400名を超える参加者を迎え盛会に終えることができた。英語授業研究学会は「英語授業のあり方に関して、理論と実践の両面からの研究と教育現場での授業改革支援」を目的として、1989年に設立され、これまで35年の歴史を刻んできた。大阪教育大学附属天王寺中学校の一教室で、樋口忠彦先生や高橋一幸先生を始め、ほんの数名の教員でスタートした学会は、今や会員700名規模の大きな学会に発展してきた。

私が英授研に参加したのは、前任校である神戸大学附属住吉中学校に赴任した1990年である。学会からの関西支部春季大会の案内に興味を持ち、参加することした。当時、大阪府千早赤阪中学校の西岡智先生の中学校の授業ビデオを観て、「これほど多くの英語を聞かせるのが英語授業なのか」と目から鱗が落ちる思いであった。それ以来、関西支部の例会にも参加するようになり、高橋先生、加藤京子先生、稲岡章代先生の授業や会員の先生方の実践から大いに刺激を受け、英授研で学んだことを自分の英語授業に生かしてきた。

附属中学校で初めて担当した1年生の授業ビデオを樋口先生にお渡しし、1991年12月の第24回例会で発表することになった。その後、私自身も学会員となり、ビデオによる授業研究や実践研究発表の機会を与えていただいた。特にビデオによる授業研究では、樋口先生からは厳しいコメントをいただき、それを糧に自分自身成長することができたのではないかと考えている。また英授研の先生方の研究や実践から本当に多くのことを学び、自分の授業改善につなげることができた。

現在は、教育学部で小学校教員を目指す学生の指導に当たっている。小学校外国語の教科化に伴い、外国語（英語）指導法の授業を担当している。小中高を通した英語教育が求められる中、小学校英語においても授業のあり方に関して多くの課題が残されていると考える。また、大学生を指導する中で、彼らが受けてきた小中高の授業のあり方についても考察する必要があると感じている。英授研が発足して35年。英語教育を取り巻く状況も大きく変化を遂げてきた。設立当時はチームティーチングのあり方が研究課題の1つとなっていた。その後、小学校への英語教育の導入、GIGAスクール構想によるICT環境の変化、AIの英語授業における活用など、英語授業は大きく変化してきた。時代に応じて、目指すべき英語授業のあり方も変わっていくのは当然である。以前は行えなかったことが可能となり、英語授業の可能性が高まったと言えよう。その中でも、変わらないものは、英語教師が生徒の可能性を信じ、英語教育に取り組む姿である。英授研はそういった教師の拠りどころであり続けると信じている。

2024年11月17日(日)

大阪商業大学

授業実践紹介と研究協議

中学校「生徒全員が参加できる授業を目指して

—『守・破・離』を意識した教科書ベースの取り組み—(中2)」

授業者：秋山容洋(姫路市立家島中学校)

教室の中で全員が学習に集中しているか。これは英語教師ならば一度は立ち止まって考えたことのある問いではないだろうか。本発表では、教科書をベースにしながらも全員が主体的に関わり、確かな英語力を育むことを目指した授業実践が紹介された。

秋山先生の授業を支えるのは、「いつも笑顔を忘れない」「友だちをほめる」「目と目を合わせる」といった素敵なポリシーであり、これには先生の英語教育への情熱と生徒一人ひとりを大切にする姿勢が感じられた。また、元気でテンポの良い語り口や、教科書の題材に関連してユーカリの枝を取り出すといったユニークな工夫は、秋山先生ならではの魅力的な特徴であった。

特に印象的だったのは、ペアワークの前にスローラーナーが正しく発音できているかを自然に確認していた点や、ルーティンの活動や多彩な教材を通じて、生徒が休む間もなく集中していた点である。さらに、答えをすぐに示すのではなく、生徒との対話を通じて答えを引き出す姿勢が見られた。こうした指導の工夫により、全員が参加し、学びを深めていくことが可能になっていた。また、学習内容の意識づけや既習表現の活用、過去に学んだトピックとの関連づけ、繰り返し練習するプロセスが、生徒全員による包括的な学びを支えていると感じられた。

協議では多くの質問がなされ、時間が足りないほどであった。さらに、米崎先生による講評では、授業中の生徒の学び合う姿を「ウェルビーイング」の視点から捉える視点が示され、研究的な観点からも大変示唆に富む発表であった。

京都教育大学附属京都小中学校 今西竜也

高等学校「題材を生かし、「やりとり」につなげる授業(英語コミュニケーションⅡ)」

発表者：野田玲子(大阪府立四條畷高等学校)

今回ご紹介されたのは、ELEMENTⅡのLesson4: The Century of War (Life in a Jar)を扱う、3時間目(6時間配当)の実践報告である。本授業の展開に際して、助言者である松下信之先生(大阪府教育庁)のほか、津久井貴之先生(群馬大学)、工藤洋路先生(玉川大学)が授業案作成段階でご助言・ご協力をされている。

野田先生は文学専攻のご出身で、一貫して言葉へのこだわりをもった授業展開をされていた。今回の授業実践を拝見し、テキストへの向き合い方について改めて考える機会をいただいたと思う。

Role Play (Irena と (Irena からゲッターの外へ子どもを逃がす提案をされる) ユダヤ人の母親)

やその後の Writing 活動を通して、登場人物の心情理解を通じた「深い」本文理解が促されていた。特に、本文の最終段落にある Irena による“regret”という一語に込められた意味を理解するために「再びテキストに戻る」ことの必要性が示されていた。生徒たちは、言葉（一語）にこだわることの重要性に気づき、これからさまざまな英文を読む際に大切な姿勢、そして示唆を得られたのではないかと思う。

<配布資料（指導案）より>

① 本時の活動の意図：

Scene 2 始めの、They realized that telling parents to part with their children was a terrible task. について、Irena と母親の間でどのようなやり取りがあったのか、ロールプレイを通して心情の理解を促し、Scene 4 の “I continue to regret that I did so little. This regret will follow me to my death.” の言葉に込められた心情の理解へとつなげる。

② 授業の展開

1. Greeting
2. Review
3. Oral Introduction
4. Reading the text
5. Reading Aloud
6. Retelling
7. Role Play
8. Greeting

<助言者分析（スライド資料）より>

① 授業の特徴

- ・単元の目標を踏まえた授業設計の実現。
- ・4技能5領域の言語活動を通じた内容理解。
- ・教員の英語使用が生徒のモデルとなっている点。
- ・教科書本文の内容に基づき、学んだ言語材料等を活用した表現活動の設定。
- ・Role Play や次時の Writing 活動（発話した内容を書くことによる、振り返りの場面設定）により、出来事や登場人物の心情等の理解を深め、意見の構築を促している点。

② 内容理解を促す工夫（提案）

- ・登場人物の関係等を図示しながらの口頭導入
- ・黙読後の QA（推論発問や評価発問）
- ・Retelling の準備

奈良女子大学附属中等教育学校 山本賀世

講演

「探究！4つのステップで学びが変わる」

講演者：菅 正隆（大阪城南女子短期大学）

なぜ探究が必要か。それを知る前に、現在の社会状況はもちろん、10年、20年先の日本社会がどうなっているかを知っておく必要がある。

大学は6割、短大は9割が定員割れの時代である。少子化はますます進み、学校園は大きく減っていくだろう。しかしながら、通信制高校に通う生徒は近年、毎年1万人増えている。つまり、子供は変わってきているのである。子供は学びに対する楽しさを感じていない。だが、それを伝えられるのは学校だけである。生きる力を身に付けるためには学力をつけたいといけない。探究とは、思考力と課題解決力を養うことにほかならない。

講演では、先の社会状況や学習指導要領で求められている教育の流れを確認したあと、外国語科における探究の目標案と「英語探究基礎」の目標の私案をそれぞれ示していただいた。もちろん、目標だけでなく、その目標を授業で具現化するために、4つの「探究のステップ」を具体例とともに示していただいた。探究のステップとは、①課題の設定 ②情報の収集(input) ③整理・分析(intake) ④まとめ・発表(output)である。

まず、生徒は①の前に、題材に関する日常的な話題のプレゼンテーションを動画視聴する。そしてその内容に関するQ&Aを通して概要を捉えつつ、自分の発表に使える表現や効果的な発表の仕方について確認する(①・②)。次に、これまでの学習を踏まえて、自分の発表のアウトラインやメモを作成する(③)。その後、ペアでアウトラインやメモを基に発表し合い(④)、互いに発表内容に関して質問し合う(③)。最後にペアの相手を変えて、再度発表と質問し合う(④・③)。この4つのステップを踏むことで、子供の学び方が変わってくる。

子供たちに未来の社会で必要とされる力を養うため、今回の講演を機に、多くの先生方が探究学習に取り組んでいかれることを期待したい。

宝塚市立宝塚第一中学校 神原 勝

2024年11月24日(日)

文教大学東京あだちキャンパス

映像による中学校授業研究協議

中学3年生 「生徒の『今』と教科書をつなぐ」

授業者：清水 彩 (前橋市立南橋中学校)

分析者：高橋一幸 (神奈川大学)

今回の授業は、教科書の題材を日常生活に結びつけ、生徒の興味を引き出す工夫が凝らされていた。まず、AIを活用した冒頭のビデオレターによって、生徒たちの興味を惹きつけ、授業への関心を高めていた。授業は、オーストラリアの環境問題についてのインタラクションから始まり、生徒の身近な問題であるビニール袋の使用量に焦点を当てながら、教科書内容と生徒に身近な暮らしとを結びつけていった。次に、教科書本文の内容をビデオで確認し、あえて日本語で丁寧なやりとりすることによって、生徒は内容についてより理解を深めることができた。また、海のない群馬県における海洋プラスチック汚染の問題を、NHK ぐんまの映像を用いて具体的に提示したり、清水先生が自ら英訳した前橋市発行の環境問題に関する記事をジグソー法で共有したりすることで、教科書の内容と生徒の生活を結びつけ、より身近な環境問題への意識を高めることができた。最終的な発表では、生徒たちは教科書の英語を自分の言葉で表現し、オーストラリアの生徒に向けて前橋の環境問題について堂々とプレゼンテーションを行うことができた。単に教科書の内容を学ぶだけでなく、清水先生が冒頭で語っていた「題材と日常をいかに結びつけるか」という視点が随所に見られ、生徒が自分ごととして環境問題を捉え、行動する力を育むための素晴らしい授業であった。

吉岡町立吉岡中学校 井上晋太郎

高校2年生 英語コミュニケーションII 「関連英文の挿入を論理的な発話につなげる」

授業者：笹生綾子 (東京都立日比谷高等学校)

分析者：本多敏幸 (都留文科大学 他)

学力が高く、授業内活動にも積極的に取り組んで意欲が高い生徒達は、教科書の概要を難なくとらえられるレベルにある。そうした状況で『関連英文』を読ませて、生徒達をさらに上に導く指導は圧巻だった。和やかな授業全体を通じて生徒達に笑いが起こり、教師と生徒達の親和関係が見られるのは、笹尾先生の普段の授業における生徒達との強い信頼関係を表していた。最初に前時の復習のリテリングをした2名の生徒は、おそらく平均的な中高の教員を上回る英語力。笹尾先生の英語力も彼らに負けていない。活動の途中で先生がする例の提示の仕方が見事。やや不完全な生徒の発言をうまく修正して導く先生の力量にも脱帽。授業後半には、内容を理解している生徒達に適度な負荷をかける(=与えられた文にあえて反駁させる)ことで、別の視点で考えを深めさせるという展開。授業を通じて、ペアワーク、グループワークがちりばめられており、生徒達は笹尾先生が

らだけではなく、他の生徒達から多くを学んでいるという印象だった。output 活動が英語力に繋がることが実感できる授業の典型だった。

東京都市大学附属中学校・高等学校 高橋信博

シンポジウム

「英語科における『思考力・判断力・表現力』とは？」

—評価者としての教師に求められること—

根岸雅史先生 (東京外国語大学)

津久井貴之先生 (群馬大学)

秋季大会最後のプログラムは、東京外国語大学の根岸雅史先生と群馬大学の津久井貴之先生との対談形式で行われた。最初に、対談の前に根岸先生の講演が行われた。根岸先生のお話によれば、話す活動や書く活動におけるテスト問題を見ると、目的・場面・状況が書かれている問題が増えてきている。しかし、受容技能（聞く・読む）では目場状の設定が書かれていない問題も散見されると述べていた。私が根岸先生の話聞いていて印象的だったのは、「コミュニケーションの目的・場面・状況に応じたタスクになっているかという観点でみると、場面・状況はあるけれども「応じたタスク」にはなっていない」ということであった。まさに、作問する側からみると何とも耳の痛い話であった。

次に、文科省が出している参考資料では、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じた課題達成（思考・判断・表現）について言及しているが、教科書の中にはコミュニケーションの目的・場面・状況が示されていないものが思判表の評価に用いられていると述べていた。（たとえば、コミュニケーションの目的・場面・状況を設定し、それに応じて臨機応変にリテリングを行っていないなど。）教える側として、指導と評価の一体化の視点から目的・場面・状況に応じた課題を設定していく必要があるのではと考えた。

このあとの対談では、「目的・場面・状況に応じた」アウトプットの方法・中身・相手意識に関することが話題となった。つまり、私の解釈では「目的・場面・状況に応じた」思考・判断・表現の方法や内容等にもつながる話題であろうと思われた。また、「目的・場面・状況」をどれだけオーセンティックに設定して思考力・判断力・表現力の評価につなげていくかに関する話では、生徒の立場で考えた時に、生徒自身が「自分ごと」として捉えら



れるようなタスク設定の方法やバランスが話題となった。さらに、対談の中では、学期単位や単元単位で、バックワードで授業をデザインし、普段から「この目的・場面・状況だったらどのように表現して課題を解決するか」を生徒に意識させる指導や支援が必要であるということや、タスク設定のレベルを考える際に、生徒がタスクを母語で行った場合に「目的・場面・状況」に応じて「自分ごと」としてスムーズにできるかどうかを考慮することなどに話が及んだ。

次に、テストについて、「コミュニケーションの目的・場面・状況に応じた」パフォーマンステストにすることで、生徒や ALT を含む教師にとって重要な発見や学びがあると述べていた。これは、生徒のパフォーマンスを通して、これまでの指導や生徒の学習を振り返るきっかけや材料を得ることだ。私自身も、テスト実施を通して、生徒がどのようなことができている、何が課題なのかを整理して今後の指導の改善につなげることの重要性について考えることができた。今回の根岸先生のご講演や対談を通して学んだことを、日常の授業で具現化し、実践していきたいと思う。

横浜市立金沢高等学校 鈴木千貴

<編集後記>

英語授業研究会会報第 106 号をお届けします。ご高覧いただけましたら幸いに存じます。巻頭言、秋季大会の参加記執筆にご協力いただきました皆様にお礼申し上げます。おかげさまで今号も充実した内容になりました。授業テーマも分析の視点も、多岐にわたっています。これらのインプットに自分なりの工夫を加え、3 学期の授業でアウトプットできるよう、残り少ない今年度を駆け抜けようと思います。

**関東支部 会報担当 松尾真太郎（筑波大学附属駒場中・高等学校）
桐井 誠（文教大学）**